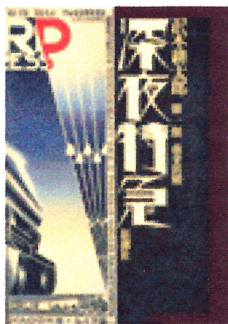


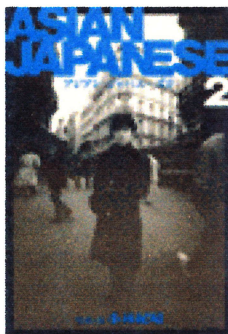
カルロス・カスタネダ
著（講談社学術文庫）



ラム・ダス+ラマファン
デーション著（平
河出版）



沢木耕太郎著
（新潮文庫）



小林紀晴著
（JICC出版）

●レヴィ=ストロ
ース（1908年）
文化人類学者。著作
『悲しき熱帯』は、
氏が説く構造主義の
定本。トテモ難解
で、いったいこの本
の何処が「旅に抗う
哲学」なのか全然判
らなかつた（笑）

ね。

『……だから、「旅に抗う旅」の方法を発見しなければなら
ない。すべての鍵は、日常の中にある。もしも、人間が自
分のまわりにあるもののすべてを、ていねいに、細心の注意
と愛を持って観察し、とりあつかうことができるようになれば、
その人間には、この宇宙と生命が常に別のものにむかって
変化し、動いている存在だということがわかってくるはず
だ。そして、その動きに自分を同調させていくことができる
ようになれば、ぼくたちはそのとき、たえず未知のなかに踏
み込んでいく、宇宙と同じ生命体でいることができる。宇宙
自身がつねに自己探求を続け、未知の形態に自己変容をおこ
なっている、巨大な旅人なのではないか。そのことに気がつ
くとき、ぼくたちのまえには、新しい旅のすがたが、あらわ
れてくるようになる。人間の内なる世界と外の世界を媒介す
るものとしての旅………』

いやはや、見事な、絵に描いたようなヌース的優等生的文
章で終わるのだが。そ一言ってる中沢氏だって、ネパール行
ってチベット仏教の中に三年間もいたんではなかったっけ？
なァーんか説得力ないよなァ〜なんて思ってしまう私だ。

確かに、三次元を何処までいっても自分は変わらないのか
もしれない。だけど、それでも、一度もこの年になるまで海
外に行ったことがない私としては、体力があるうちに経験し
て見たいものだと思う。たとえ「何もかわらないにしても」
ね。

★

旅をすることと、自己のアイデンティティーを探することは
必然的にリンクしてくる気がするし、そうすると、当然何処
にアイデンティファイするのか？共同体というものを考えは
じめる。家庭、学校、会社、地域共同体、村社会、既存のす
べての共同体が意味を無くしはじめたこの現代の日本で、考
えられる次の共同体とはどういうものなのか？既存の共同体
に対する違和感を、モチーフこそ違え、一貫して多数の作品
で表現して来た、村上龍、最新刊『希望の国のエクソダス』
の不登校中学生の共同体から、ヌースアカデメイアまで。本
当のエクソダス（脱出）とは何か？カッコイイ試論をやるつ
もりだったけどさ。ま。暑いからさあ〜。（笑）ま、その
うちね。

最後に、私の好きな池澤夏樹氏の小説から、今回のテーマ
に近い文章を紹介して終わりにしたい。

それでは皆さん。良き2000年の旅を！

★